

《紹介》

B. Krisberg/J. F. Austin. *Reinventing Juvenile Justice*. Sage Publications, 1993.

渡辺則芳訳『アメリカ少年司法の再生』（敬文堂、一九九六年）

菊 田 幸 一

ケント（一九六六）、ゴールト（一九六七）判決以後におけるアメリカの少年司法制度は、保守的な改革議題が少年司法をめぐる論議の中心となり、伝統的な少年法の基本構造にも変革を求めるなど大変革を余儀なくされてきた。ところがこの時期に至っては、その変動の評価を客観的に検討することが可能であるとし、裁判の状況と各州で実施されてきた幾多の試行錯誤を冷静に評価し、あるべき少年司法制度の方向性を示そうとしたのが本書である。

原著者の一人、バリー・クリスバーグ氏は、カリフォルニア大バークレイ校で犯罪学を教授した経験があり、現在は全米犯罪と非行に関する評議会（NCCD）の会長職にある。本会（NCCD in JAPAN）は、その日本版であり、かねてから連携をとっており、同会長の今回の著書に関しては特段の意義をもつものである。著者は本書において「少年裁判所の歴史的な理想像を再発見し今日的なものにしていくことであ

る」（二二二頁）とし、「施設収容は、その出費と肯定的な結果がないため、最後の手段に留まるべきである」と主張し、少年法本来の精神が再びアメリカ司法において復帰していることを示唆している。

その兆しは、すでにニューヨーク市少年司法局や、フロリダ州、マサチューセッツ州において顕著に実践されつつある。そのいわば「少年司法の再生」は、重大な少年犯罪は法執行機関の問題としてだけでなく、ひろく社会福祉問題として視野に入れることであり、少年犯罪者は被害者および被害付与者として理解することが基本にならなければならないと主張する。人道的で進歩的な少年司法の制度を求めた闘いを続ける以外に選択肢はないと結論付けている。少年法理念の原点にもどることの主張は、わが国の現状に大きな支えとなるはずである。

最後に、困難な専門書を平易な文章に翻訳された渡辺教授

に敬意を表したい。

（なお、本稿は、『NCCD in JAPAN』（全国犯罪・非行協議会機関誌）（第七号、一九九七年三月）に、掲載されたものであるが、普及性を考慮して、本誌に転載することとした。なお、転載にあたってご了承いただいた菊田教授および『NCCD in JAPAN』編集部に感謝申し上げます。「渡辺則芳」）